

「美紗子、すまん」



「え……？」

「この状態でほっとけないだろう」



「ふう〜ん」

変な声を出して、涼子がぴったりと体をくっつけてくる。

まったく、どういう状況か理解してるのか？

せっかく美紗子の飯にありつけるはずだったのに……。



「荒浜さん……」

「すまん。 今度、埋め合わせはするから」



「あ、いえ……助けてもらったのは……私ですから……」



「それじゃあ、おやすみなさいっ！」

「あ……」

美紗子が深く頭を下げて、自分の家のほうへと走り去って行く。

その背中がとても寂しげなものに見えたが、今の俺にはどうすることもできなかった。

きっと悲しませてしまったんだろうな。

自分よりも涼子を選んだと感じただろうな。

だが、こんな状態の涼子を1人にしておくわけにはいかない。

ひとまず、店の前まで運ばなければならなかった。

「んっ？」



「く〜っ……く〜っ……」

「寝るなっ！」

思いっきり体重をかけてきてる涼子の体は……ものすごく柔らかかった……。



「ほら、ついたぞ。しっかり歩け」



「ん〜っ、ひつく……だーいじょおーぶうーっ！」

「全然大丈夫じゃないだろ」

涼子の店に入って、ひとまず椅子の上に座らせる。

ここまで酔った姿は初めて見るな。

いったい何があったのやら……。

「えーと、電気は……これか」



室内の明かりをつけると、見慣れた空間が広がった。

考えてみれば、涼子と会うのはいつもこの場所で、他ではほとんど顔を合わせたことがない。

友達とかいっぱいいいそうに見えるけど、実際の友好関係なんか全く知らないんだよな。



「あ～、水がおいし～」

「本当にメチャクチャ飲んだな」



「久しぶりに……ひっく……友達とね……はあ、熱いわあ……」



「んっ？ んん～～？」

涼子がじっと俺を見つめてくる。

……目が据わってるぞ。



「荒浜くん？」

「なんだ？」



「なんでここにいるのかしらあ？」

「今も思いっきり酔ってやがるな……」



「んん～っ、ねむうい～」

涼子がカウンターに突っ伏す。

このままほっとくと、ここで寝てしまいそうだ。

いや、自分の家でもあるんだから、それでも構わないんだろうけど。



「荒浜くん」

「なんだ？」



「なんで結婚しちゃうのよお」

「は？」

結婚？

俺が？

いつ？

「結婚はしないって言ってるだろ」



「するっ！ するに決まってるっ！！」

涼子がバンバンとテーブルを叩く。

酔いが頭にまで回って絶好調って感じだ。

実は酒には弱いほうだったんだろうか。

涼子の新しい一面を見た気がする。



「他の女の人と結婚して私のことなんか捨てちゃうんでしょ……」

「いや、別に捨てたりは……」



「捨てるっ！ 捨てるに決まってるっ！！」

「うおっ」

涼子がまたテーブルを叩く。

手がつけられない。

こいつ、酔うとこんなに荒れるのか。

「落ち着けよ。結婚しないって言ってるだろ」



「するわよ。絶対する」

「なんでそう思うんだよ？」



「あんなに家事ができて若くてお金持ってて知的な感じの女の子と結婚しないわけがないでしょーがっ！！」

「落ち着けっ！ どう考えても他の4人が合体してるぞ、それっ！」



「どーせどーせ」

また、テーブルに突っ伏した。

忙しい奴だな。



「アタシは家事はそこそこしかできませんよ～。お店のことばかりやってるから、自分の部屋はごっちゃごちゃですよ～」

「そ、そうなのか」



「あんなに可愛らしくもありませんよ～。若くもありませんよ～。オバサンですよ～」



「オバサン……よおおっ！！ この前、親戚の子供からそう呼ばれたよおおっ！！！ そういう年になってきたわよおおっ！！！」

「き、気にするな。どうせ子供の言ったことだ」



「お金だってね……そりゃあ貧乏じゃないけど、豪遊できるほど儲かってるわけじゃないし……」



「お客さんの相手するのは楽しいけど、最近は体力的にちょっときついときがあるし……」

「まあ……大変そうだな」



「だから、こんな女いないわよね……捨てちゃうのよね……」

「結局そこに戻るんかい」



「わかってるわよっ！ 結婚するんでしょうっ！！ さっさとその女のところ行きなさいよっ！！！」



「あ……いたたたたっ……頭いたあ～い。 水取ってえ～」

「へいへい」

ここは大人しく言うことを聞いておこう。

下手に意見したら無駄に再燃しそうだ。



「ごくっ……ごくっ……ごくっ……ごくっ……」



「はあ……」

水を一気に飲みした涼子は、テーブルに突っ伏したまま愚痴りだしてきた。



「それにしても……ほんととあの男は……どれだけ失礼なのよ」

「……俺？」



「アタシのほうには何人セフレがいるのかとか……」



「いるか、そんなも————んっ！！！！」

「……………」

いなかったのか。

それは、失礼しました……と、今は心の中でしか言えない。



「あいつ、絶対アタシが男の経験豊富だと思ってるし……」



「そりゃあ初体験はちょっと早かったわよ。学生時代、付き合った人に捧げたわよ」



「そのあとも、何人か付き合ったけど、アタシなりに真剣だったのよ。する前に別れた人だっているわよ」



「それに今は忙しくて彼氏なんか作れないっつーのっ！！！！」

「あの……そういうの喋っちゃっていいんすか？」



「他にしてる人がいるとは思ってたけど……他に4人？ 会社の同僚とか学生さんとか社長さんとか……」



「アタシはセフレその1か2か3か4か5か6のどれなのよ
おおお————ツツ！！！！！」

「べ、別に番号付けしたりはしてませんが……」

「あと、番号ひとつ多い……」



「わかってないのよ、あいつはっ！ あいつとしてるとき、アタシがどれだけ幸せかって！」



「ぐーたらだけど嘘はつかないし、困ったときは助けてくれるし……」

「うおっ」

涼子がずいっと顔を近づけてくる。

さ、酒臭い。



「この想いっ！！ 言えなかった辛さがわかってんのっ！！？」

「す、すいません。 全然わかってませんでした」



「関係が壊れないようにバランスとってきたつもりだったのに……結婚？ 結婚ですって？」



「ふざけんじゃないわよっ！！！！」

「すいませんっ！ マジ、すいませんっ！！」



「他の女と結婚するくらいなら……」



「アタシと結婚しなさいよおおおおお——
——ツツツ！！！！！」

「……………」

これが、本音か？

これが、涼子の本当の気持ちなのか？

なんか意外過ぎて言葉が見つからない。

もしも、本当にこんな気持ちを隠して俺と関係を持っていたのなら…… 俺は、色々と酷いことをしてきたのかもしれない……。



「ん～？ 荒浜くん？」

「は？」



「なによ、いたのねえ。 それならそうって言いなさいよ」

「いや……お前、なに言って……」



「今日はどうする？ なんかことしちゃう？」

「お、おい」

涼子の手が俺の股間をさすってくる。

かなり露骨なお誘いだ。

こんなことは滅多にないんだが……。

「待て。 落ち着け。 お前、ものすごく酔ってるだろ」



「酔ってないわよお……ふふっ、だいぶすっきりしてきたわぁ」



「今日はしないの？ したくないの？」

「いや、したくないってことはないんだが……」

さっき自分が叫んだことをもう忘れてるのか？

それとも、これが夢だとか思ってるのか？

わ、わからん。

さっぱりわからん。

これは……誘いを受けてしまってもいいのか？



「ねえ……早くう……」

人が考えてる間にも、涼子がズボンを脱がしにかかる。

これはもう、この状態から逃げるわけにはいかない。

涼子はしたがってるし、俺のチンポも完全に目を覚ましてしまっていた。

やることをやって……必要なことはその後に考えよう。

今はもう……やりたかった……。





「んっ……と……ちゃんと挟まったかしら？」

「あ、ああ……………」

涼子が上半身裸になって、俺のチンポを胸で挟んでくれた。

柔らかな感触に包み込まれて、思わず腰をぶるりと震わせてしまう。



「胸でするのも久しぶりよね」

「そうだな」



「どう？ 久しぶりに挟まれた気分は？」

「最高に決まってるだろ」

柔らかく、それでいて温かい感触。

チンポがゆっくりと溶かされてるみたいな感じで、無意識のうちに腰を前に突き出してしまっていた。



「ふふっ、もう我慢できないって感じね」

涼子の視線が俺のほうに向けられる。

薄く開いた唇から舌を出して、いやらしい雰囲気漂わせていた。

「んくっ……」



「んっ……んっ……んっ………んんっ………」

涼子が胸を左右から押さえつけて、チンポを上下に扱き始める。

柔らかな感触がより強く感じられて、心地良さに体がぶるりと震えた。

本当にいつ見てもデカイおっぱいだ。

こぼれ落ちそうな膨らみは、他の女達にはない魅力として感じられる。

肌触りも良くて、チンポを擦られるたびに電気にも似た刺激が伝わってきた。



「すごいわね。 おちんぽの先っぽが真っ赤よ」

「ああ……気持ちいいからな」



「他の女の子達にはできないでしょう？」



「胸の大きい人はいるみたいだけど…… アタシほどあなたのことを理解してるとは思えないし」

「んっ……んっ……」

チンポの根元から先端まで、涼子の胸によって刺激される。

心地良さが緩やかに広がってきて、チンポがさらに硬くなってしまった。

ただ胸で擦るだけじゃこうはいかない。

力加減、あるいはチンポの感じる部分を理解してるからこそ、涼子のパイズリは格別にいいんだ。

尿道口からは早くもカウパー液が染み出していて、それはしっかりと涼子にも確認されていた。



「おちんぽが苦しうね。 ちょっと泣いてるみたい」

「嬉し涙ってやつだな」



「ふふっ……可愛いわ」

涼子が嬉しそうに目を細める。

チンポに顔を寄せて、わざと息をかけて刺激を与えてきた。



「ん、んっ……硬いわね」

「そりゃ、な……」



「でも、まだまだ始まったばかりなんだから、簡単にはイかないだよ」

「当たり前だ」



「ふふっ……んっ……んっ……んんっ……………！」

涼子が笑みを浮かべながら、胸を上下に動かしてくる。

心地良さが下腹部の中に染み込んできて、じわじわと射精感が高まってくるのが感じられた。

おっぱいってのは、どうしてこんなに柔らかいんだ。

チンポを擦られれば擦られるほど気持ち良くなってきて、カウパー液はどんどん溢れ出していた。

「んっ……く、ふっ……ああ……」



「だいぶ気持ち良さそうね」

「そりゃ、な……」



「アタシのおっぱい、たまらないでしょう？」



「たまらなくて、イきたくなるでしょう？」

「ううっ」



「だから……もっと感じていいのよ」



「アタシのおっぱいで、もっと気持ち良くなっていいのよ」

「んんっ……！」

チンポ全体にむにゅっとした感触が広がる。

気持ち良すぎて何度も体が震えた。

柔らかさと温かさに、頭がぼんやりとしてくる。

尿道口から染み出したカウパー液は、涼子のおっぱいに付着したあと、今度は逆に俺のチンポ自体に塗りたくられていた。



「ふふっ、おっぱいもおちんぽもぬるぬるね」

「ああ……」



「気持ちいいのね。アタシのおっぱいで、こんなに感じてるのね」



「イきたい？ もうイきたかったりするの？」

「まだ、まだ……」



「イきたかったら、イってもいいのよ」

「くうっ……！」

涼子の体が上下に揺れ始める。

胸の動きだけではなく、体全体でチンポを刺激し始めた。

「うっ……うっ……」

気持ちいい。

快感が一気に強くなった。

下腹部の奥には熱いものが溜まって、油断するとすぐにも射精してしまいそうだった。



「んっ……んっ……んんっ……んんうっ……………！」

「う、あ……」



「我慢するのは、体に、毒よ」

「くぅ～っ……」



「それでも、イかないって言うのなら……」



「ん……れろっ……」

「あっ……！」

涼子が舌を出して、チンポの先端を舐めた。

今までとは違った刺激が伝わってきて、思わず腰を震えさせた。



「こういうのも……れろっ、ぴちゃっ……好きでしょう？」

「く、うっ……」



「それとも嫌い？ 嫌いだったら……れろっ、やめるわよ？」

「嫌い、な、わけが……ないだろう」



「ふふっ……れろっ……れろれろっ……れろおっ……」

涼子が嬉しそうに、チンポの先端を舐め続ける。

胸で挟んでるから咥えることはできないが、その分、刺激を亀頭に集中させてきた。



「おっぱいと舌でされるの……気持ちいい？」

「あ、あ……」



「気持ち良くないはずがないわよね？ おちんぽ、こんなに勃起させて……」



「おちんぽは……れろっ、嘘をつかないものね」

「んんんっ……！」

射精感がグングン込み上げてくる。

我慢しようとしても、それを突き破るようにして高まってくる。

涼子の舌はねっとりとチンポに絡み付いてきて、皮の内側まで唾液が染み込んできた。



「んっ……んっ……れろっ…… ん、んんっ……れろれろっ……ふ、はあ……」

「ううっ……くうっ……」



「本当に、硬いおちんぽね……」



「んっ、んっ……擦ってる、アタシのおっぱいが…… れろっ、溶けちゃいそうよ」

「う、お……」

チンポに痺れのようなものが広がってくる。

精液の塊がのぼってくるような、そんな感覚を味わっていた。

そろそろ限界だ。

涼子のパイズリが気持ち良すぎる。

チンポの先っぽはカウパー液と唾液でベトベトになっていて、かなり卑猥な光景を作り出していた。



「そろそろ……本当に、イっちゃいそうね」

「かも……な……」



「イきたい？ 本当は射精したいんでしょう？」

「あ、ああ……」

嘘をついても意味はない。

そんなことをすれば、涼子は延々と焦らし続けるだろう。

だから、俺は正直に何度かうなずいて見せた。



「ふふっ……いいわよ……イかせてあげる」



「アタシのおっぱいで、気持ち良くしてあげる」



「ん……れろっ……れろっ……れろれろっ……」

「うっく……！」

涼子が胸を動かしながら、チンポの先端をペロペロと舐めてくる。

まるで、尿道口を撫でるようにして、絶え間なく刺激を与えてくる。

ああ、本当に気持ちいい。

柔らかな感触にチンポが溶けてしまいそうだ。

射精感は一気に込み上げてきて、自分でも抑えることができなかった。

「ああ……イク……」



「ん、れろっ……いつでも……いいのよ……」



「全部……あなたの、熱いのを……れろっ、全部……出して……」

「あ……あ……」



「れろっ……れろれろっ…… れろっ……れろれろれろっ……れろおお…………ツ！」

「くあっ！」



「んあ……ッ！！？」

精液は勢いよく噴き出た。

尿道口から白い粘液が飛び出して、涼子の顔や胸を汚していった。



「あ、あ……熱い……」

「く、あ……」

心地良さが下腹部を中心に広がっていく。

まるで、電気が流れたみたいな刺激が、手足の指先にまで伝わっていった。



「ふふっ、いっぱい出たわね」

「はあ……あ……………」



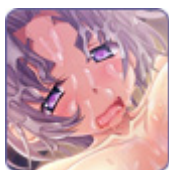
「すごく熱くて、濃くて……あなたのこれ、やっぱり最高よ」



「だから、もっと……ふふっ、今度はアタシの中に、直接ちょうだい」

そう言って、涼子が目を細めて笑った。

快樂の時間は、まだまだ終わらないようだった。



「ん……ふああっ……！」

「うっく！」

俺の体が床の上に寝かされて、その上に涼子の体が跨ってきた。

射精したばかりのチンポが膣の中に呑み込まれて、柔らかな肉ヒダの感触が襲い掛かってきた。



「あ、くあっ……んんんうっ……！」

「ああああ……」



「出した、ばっかりなのに……んんっ、とても硬いのね」



「それに……ふあっ……すごく、熱いわ……」

「うっ……うっ……」

チンポが完全に根元まで呑み込まれてしまう。

結合部からグチュグチュと湿った音が聞こえて、それが俺の興奮を高めてくれた。

涼子のマンコもかなり濡れてる。

さっきのパイズリで、実は自分も感じてたらしい。

肉ヒダの動きがすごくいやらしくて、まるでマンコでフェラチオされてるみたいに吸い上げられていた。



「んっ……んうっ……く、ふっ……んんっ……！」

「う、うっ……くうっ……」



「ふふっ、この体勢は、やっぱりいいわね」

「くっ……何が……？」



「あなたの顔を……見下ろせるもの」

「そういう意味か……んんっ……」



「気持ち良さそうな、顔……してる……」

「そりゃ、な……」

それ以外の顔になるわけがない。

涼子が腰を上下させるたびに、チンポに強烈な快感が伝わってくる。

カリに引っ掛かる肉ヒダの感触が気持ち良すぎて、思わず声が裏返ってしまいそうになった。



「さっきいったばかりなのに、もうイきそうになってるの？」

「……まさか」



「でも、体はそうは言っていないみたいよ？」

「んっ……！」

涼子が下半身を叩き付けるようにして、チンポを強く擦ってくる。

肉ヒダがずるっと滑る感触に、何度も体が震えてしまった。

ものすごく気持ちいい。

この快樂に身を委ねれば、きっと数分のうちにはイってしまうだろう。

だが、さすがにそれは悔しい。

イかされっぱなしでは、男が廃るというものだ。

せめて、もうしばらくはこの快樂に耐えていたかった。



「んっ……んっ……ん、うっ……んんっ……」

「くうっ……」



「本当に、硬くて、太い……ああ、おちんぽね」



「おまんこが……ふあっ、押し、広げ、られるわ」

「とりえ……だからな」



「素敵よ、あなたの……んっ、おちんぽ……最高に、素敵よ……」



「んうっ……ふ、うっ……んくっ、う、んんっ……んんんっ……！」

涼子の腰の動かし方は、まだそれほど速いものではなかった。

激しさはあるものの、じっくりと刺激を伝えてきてるって感じた。

亀頭はゴツツと子宮とぶつかって、そのたびに快感が広がっていった。



「ああ、硬い……んっ、さっき、いったなんて……思えないほどね」



「精液も、んっく……いっぱい、出してくれるん、でしょう？ ふ、あああッ！」

「出すって言うか……搾り取られるって言うか……」



「どっち、でも……同じよ……んんっ、最後には…… あ、あっ、気持ち良く、なるんだから……」

「まあ、な……」

話をしながら、涼子の動きは少しずつ速くなっていた。

大きく腰をグラインドさせて、勃起したチンポを擦り続けていた。

ああ……頭がぼんやりしてきた……。

気持ち良すぎて、何も考えられなくなってきた。

頭の中は射精することばかりで、チンポはもうされるがままって感じだった。



「んっ、んんっ……く、うっ……んんうっ……！」

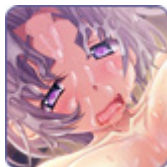
「うっく……」



「ふ、うっ……響く、う……あはあっ…………！」



「いいわ、すごく……ん、うふうっ……奥のほうに…… あふあっ、響く……ん、ああ……ッ！」



「あなたの、おちんぽ……ん、ひああんっ……すごく、感じる……ッ！」

「あ……あ……」

涼子のペースがどんどん上がっていく。

心地良さに体が震える。

チンポは膣壁にゴリゴリと擦られて、耐え難い快感が広がってくる。

このまま擦られたらドロドロに溶けてしまうんじゃないかと、そんな思考さえ抱いてしまっていた。



「ん、はっ、はあっ……気持ちいいっ……気持ちいいいい………ツ！！」

「ううっ……！」



「おまんこ、擦れて……あふあっ、感じる…… んんっ、イ、イっちゃい、そうよ……ツ！」

涼子がうっとりとした表情を浮かべる。

マンコの中は肉ヒダが激しくうねっていて、チンポをしゃぶり尽くすように吸い付いてきていた。

この感触、最高だ。

気持ち良すぎて、もうチンポを勃たせておくことしかできない。

きっと、尿道口からはカウパー液が流れ続けていて、マンコの愛液と混ざり合っているはずだった。



「ふ、ふふっ……さっき、と、どっちが……んあっ、いいかしら？」



「アタシの、おっぱいと……んあっ、おまんこ…… ん、んんっ……どっちが、好きなのかしら？」

「くっ……どっちって……言われてもな……」

「どっちも、と、しか……うっ……」

チンポが揉みしだかれる快感に耐えながら、涼子の問いかけについて考える。

どっちが気持ちいいか……。

そんなの答えなんか出るはずもない。

どっちも気持ちいいとしか答えようがなかった。



「ん、はあっ、あっ、ああっ……いっつ、ん、すごく……いっつ……！」



「この、おちんぽ、ああっ、最高よ…… ひああっ、最高に、気持ちいいわよ……ッ！」

「くうっ……！」



「イきたい？ もう……んんっ……イきたいの、かしら？」



「イきた、かったら……いつでも…… んひあっ、いつでも、イって……んんっ……いいのよ……？」

「く、お……」

下半身がとろけそうな快感が広がる。

チンポは痛いほどに勃起して、マンコの肉に擦られまくっていた。

この分だと、いつ射精してもおかしくない。

むしろ、俺の体自身は、早く射精したいと訴えかけている。

だが、こうやって射精までのもどかしさを感じるのも、俺は決して嫌いではなかった。



「あ、ん、んんっ……く、ひあんっ……ん、くうっ……………！」

「くっ……ふ……！」



「いいっ、すごく……ん、ううっ……たまらない……ああああ……………ツ！」



「おまんこが、ふあっ、ゴリゴリって…… んんっ、気持ちいいっ……たまら、ない……あふああ……………ツ！！」

「んんん……………ツ！」

射精感が高まってくる。

そろそろ我慢するのも限界だ。

下腹部の奥では熱いものが渦を巻いて、外へと飛び出す準備をしていた。



「はっ……はっ……はあっ……あああっ……ああああ……………ツ！！」

涼子が体を揺らし続ける。

大きなおっぱいが、俺の目の前で揺れ続ける。

さっきまで、この柔らかな膨らみでチンポを可愛がってもらってたんだよな。

このおっぱいでイかせてもらったんだよな。

そのことを考えると、射精感が一段と込み上げてきた。

射精したくてたまらない気持ちに陥った。



「ん、あっ、ひあっ……あ、んっ、んんうっ……くっ………！」



「熱い……ふあっ、おまんこが……熱くて、とろけそう……」

「くう、う……チンポが……んんっ、イきそうだ……」



「イって……ん、あっ……アタシの中に…… ふあっ、今度は……アタシの、おまんこに………」

「く、んっ……ううっ……くうう………ツ！」



「んあっ！？ あ、あああッ！！」

涼子のマンコを突き上げるように腰を振り始める。

それが、俺にできる唯一のことだった。

快感に浸りながら、射精の瞬間へと自らを高めていった。

「イ、ク……くあっ、イきそう、だ……」



「出して……せ、精液っ……んんっ、アタシの、中に…… あ、ああっ、熱いのを………ツ！」



「いっぱい、んあっ、いっぱい…… いっぱい、いっぱい、いっぱい………ツ！！」

涼子の興奮も、十分に高まっているようだった。

もしかすると、同じくらいのタイミングで絶頂を迎えるかもしれない。

マンコが激しく震えているのは、イきそうになっている前兆なのかもしれない。

チンポとマンコはムチャクチャに擦り合わされて、そろそろ本当の意味で限界だった。

「ん、くっ……もうイク……イク、ぞ……ッ！」



「あ、ふあっ……イって……だ、出して……あ、あ、ああっ………！」



「おまんこ、ふああっ、アタシも…… ん、んんっ、アタシもおおお………ッ！」

「ううっ、イク……イクぞ……ッ！」



「ん、ああっ、イクッ、イクッ…… ん、あ、ふああっ、イクッ、おまんこ、イクッ、いつちゃう……ッ！」



「イクッ、イクッ……イクイクイクッ……イクイクイクイク……… イクウ
ウウウ………ッ！！！」

「んんんッ！！」



「ふああああああああああああああああああああ——
——ツツツ！！！！！！」

涼子が一際高い悲鳴を上げる。

大きく体を仰け反らせながら、心地良さそうな表情を浮かべる。

チンポは痛いくらいに締め付けられて、精液が根こそぎ搾り取られるような感覚が広がっていった。

「ああ……あああ………」



「ふああ、ん……あ、ん……ふううう………」

マンコの中をビクビクと震わせながら、涼子がうっとりとした表情を浮かべる。

どうやら同時にいったようで、体のあちこちが小刻みに震えていた。



「ああ……気持ち、良かつ、た……」



「それに、この……熱い感触……」



「やっぱり、あなたのおちんぽは……最高ね……」

男としては喜んでいいであろう言葉をかけて、涼子がホッとした様子で肩から力を抜く。

どうやら満足はできたようで、心から幸せそうな表情を浮かべていた。

俺を見つめる眼が……どこか優しく感じられた……。



「はあ……」

行為を終えて涼子を部屋まで運んで、俺はそっと店を後にした。

なんだか大変なことを聞いてしまったような気がする。

あれが、涼子の本音なのだとしたら、明日からどういう顔をして会えばいいんだ。

今まで余裕ある素振りを見せてたのに、実はあんなに思い詰めてたのか？

本気で俺と結婚したいと思ってたのか？

それとも、酒が入ったせいでテンションが上がっていただけなのか……。

ああ、もうワケわかんねえ。

「やっぱり、けじめをつけるべきなのか」

結婚。

頭の中にその二文字がよぎる。



逃れられないものが迫ってきてるような感じだった。

こういうふうにならないように、それなりの注意を払ってきたつもりだったんだがな。

まあ、なるようにしかならないか。

当面の問題は……明日から涼子とどう顔を合わせるかだ。

記憶、あるんだろうか。



「ん、んんっ……！」

そんなわけで翌朝。

アパートの部屋を出て大きく伸びをして、俺は涼子の喫茶店のほうを見つめた。

結局、昨夜から気になってあまり眠れた気もしない。

今から仕事だけど、涼子が昨夜のことを覚えてるのなら、少し話をしなければならないかもしれない。

「あ……」



「あいたたた……」

涼子が店から出てきた。

ちょうどゴミ捨てに行くところだったらしい。

辛そうな顔してるのは……ただの二日酔いみたいだな。



「あら、今から仕事？ いってらっしゃい」

「おう……辛そうだな？」



「昨日、懐かしい友達と会って飲みすぎちゃって……」



「あいたたたたたっ！」

「大丈夫か？」



「さっき薬飲んだから、しばらくすれば収まると思うんだけど……」



「は～っ、記憶がなくなるくらい飲んだのは久しぶりだわ」

「ないのかよ」



「どうやって帰って来たとか全然」

涼子がそう言って恥ずかしそうに苦笑いする。

嘘をついているようには見えない。

どうやら、酒のせいで本当に覚えていないらしい。

……助かった、かな。



「ん～？ そういえば……」

「ん？」



「昨日の夜？ もしかして会ったかしら？」

「い、いや……俺は……別に……」



「そう。じゃあ、夢だったのかしら？」

「なんだ？ 俺の夢でも見たのか？」



「見たような見てないような……」



「まあ、夢だからどっちでもいいわね」



「あいたっ！ いたっ……いたっ……………！」

「無理すんな。休んどけ」



「あんまり痛みが引かないようだったらそうするわ」



「お店があるからまたね」

「おう、じゃーな」

そんな会話をして涼子と別れる。

二日酔いの程度は心配だが、少なくとも昨日聞いてしまったことについては大丈夫みたいだ。

涼子だって、あんな話をしたことは知りたくないだろうし、昨夜のことは俺の中にしまっておこ

う。

「行くか」

確認すべきことをして会社へと向かう。

今日の天気も晴れ。

少し暑くなりそうな一日の始まりだった……。